

# 岡崎京子論

杉本 章五著

1980～90年代、都市に生きる現実の女性の性や喪失など、リアルな姿を描写し、時代の花形となった

岡崎京子。今年は、そんな作者の『ヘルタースケルター』が、17年の時を経て映画化されたこともあり、作者の再評価の機運が高まった。

本書もその流れで刊行された一冊ではあるが、単なる関連本ではない。リアルタイムで岡崎京子の洗礼を受けていない79年生まれの研究者が、

新たな切り口をもって、岡崎京子の作品を読み解いていくのだ。

これまでの研究は、岡崎京子の登場の衝撃や作品の鮮烈さゆえ、どうしても追憶に引っぱられがちだった。著者のような世代が、どう分析していくか。83年生まれの評者には、特に興味深い試みであった。

例えば、『ジオラマボーイ・パノラマガール』には、舞台となる「郊外」が、メディアの急造した「ホームドラマ」の再演の場として描かれている点を深く考察している。

また、ワニを飼うために売春をするOLの物語『Pink』では、高度消費社会の都市戦略で、メディアや企業が、女性達へいかに「消費すること」で自己実現できる」と刷り込んでいったか、についても指摘した。

これまで評者には、岡崎の女性像は、前の時代の女性象のようにも思

## 岡崎京子論

杉本章五

OKAZAKI  
KYOKO

(新曜社・3400円)

▼すずきもと・しよご 79年生

まれ。筑波大特任研究員。